



学校だより

平成30年11月30日

練馬区立田柄第二小学校

校長 谷田 弘子

HP <http://www.tagara2-e.nerima-ky.ed.jp> e-mail info@tagara2-e.nerima-ky.ed.jp

教育目標:元気な子ども・考える子ども・思いやる子ども

No.489

手ぶくろを買いに

校長 谷田 弘子

11月16日から3日間、本校の展覧会が行われました。保護者鑑賞日の金曜日と土曜日には、多くの方々に児童の力作を見ていただき、ありがとうございました。児童鑑賞は、兄弟学級ごとに行い、それぞれの学年の良さを十分見つけることができ、心が和む時間を過ごすことができました。いよいよ12月、2学期のまとめの月となり、個人面談が始まっています。この面談では、2学期の学校での学習の様子や生活の様子、友達関係などについてお伝えします。お忙しい時期とは思いますが、ご協力をお願いいたします。

さて、保護者の皆さんも、『手ぶくろを買いに』というお話を読んだことがある方が多いと思います。きつねの親子と人間の心温まるお話です。この本の作者は、新美南吉という方です。体が弱く、29歳7ヶ月という若さで亡くなりましたが、心に響くたくさんのお話を書きました。例えば、国語の教科書にも載っている「ごんぎつね」や「おじいさんのランプ」「花のき村の盗人たち」「牛をつないだ樁の木」など、日本の児童文化史の上で宮澤賢治と並び評されるすばらしい作家です。

お話の中には、ごんぎつねのお母さんと子供が登場します。季節は冬。森で暮らす子ぎつねは、初めて雪を知り、その冷たさに驚きます。そして、「手が冷たいよ。」と母さんぎつねに言います。それを聞いた母さんぎつねは、冷たさのあまり子供の手がしもやけになって痛くなるのがとても心配になります。そこで、町に行って暖かな毛糸の手ぶくろを買ってあげようと思います。暗くなり、町の灯が見え始めると、母さんぎつねはあることを思い出して立ち止まってしまう。それは昔、町で人間にひどい目に遭った恐ろしい思い出です。子ぎつねにどうしても手ぶくろを買ってあげたい母さんぎつねは、やむなく子ぎつねだけで行かせることにします。人間は、きつねと分かれると手ぶくろを

売ってくれないと思った母さんぎつねは、子供の片方の手を人間の手に変えて、2枚の銀貨を握らせます。そして、人間はとても恐いものだという話をし、片方の人間の手を差し出して買うように教えます。しかし、いざ町の帽子屋さんを訪ねたとき、子ぎつねは扉の向こうのあまりの明るさにめくらってしまい、まちがってきつねのほうの手を、扉の隙間から出してしまう。帽子さんは、きつねと分かったので、差し出したお金は木の葉の偽物だと思いました。そこで確かめてみると本物のお金です。帽子さんは子供用の毛糸の手ぶくろを子ぎつねの手に持たせてやりました。子ぎつねはそのとき思いました。「人間はちっとも恐ろしくないや。ぼく、間違えて本当のお手々出しちゃったの。でも帽子屋さん、どうもしなかったもの。ちゃんとこんなに暖かい手ぶくろをくれたもの。」それを聞いた母さんぎつねは信じられずに、「本当にいいものかしら。本当に人間はいいものかしら」と言葉を続けるのでした。

このお話で、母さんぎつねの言うとおりに、本当に人間が恐かったら、きつねの子と知ってひどい目に遭わせたでしょう。でも、帽子さんは、お金を受け取り、暖かな毛糸の手ぶくろを渡してくれました。やさしい人間だったのです。

子ぎつねは、その心に触れて人間を信じる気持ちになったのです。子ぎつねの言葉を聞いた母さんぎつねは、改めて人間のことを考え直し始めたのです。このお話を読むと、相手を信じることの大切さが伝わってきます。

今、スマホやiPad、パソコン、テレビなどの映像を見ることが多くなってきています。映像では考えることがあまりありません。本を読むことで、場面を想像したり、登場人物の気持ちを読み取ったり、作者の伝えたいことを考えるたりすることが重要です。映像よりもずっと頭を使います。たくさん文章に親しむことができる児童に育ってほしいと願っています。学校ではもちろんですが、冬休みを本に親しむ良い機会にしてほしいと思います。